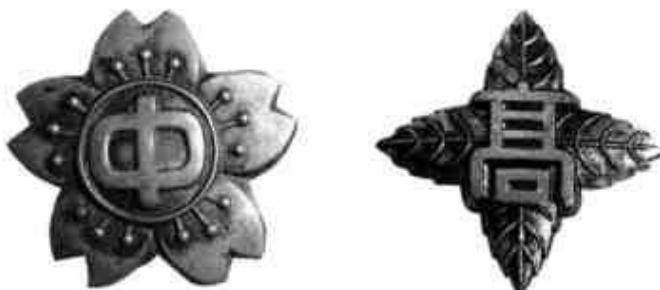


山梨県立甲府中学校
山梨県立甲府第一高等学校

写真集

百年のあゆみ



山梨県立甲府第一高等学校同窓会

百年のあゆみ刊行によせて

甲府第一高等学校同窓会長 相川義仁

昭和55年(1980)、本校は創立百周年を迎えました。

百周年記念館の建設を始め、諸行事が盛大に挙行されました。

今まで母校の歩みを詳細に記録した校誌はありませんでしたので、百周年を記念し、校誌を編纂することとなり、数名の同窓生を中心となり、作業にかかったのですが、長い年月の間に資料が散逸し、特に甲府城跡の旧校舎から現校舎への移転と、太平洋戦争中、一部校舎が戦災にあったことなどで、年

次によっては資料がすべて失われており、大変な労苦を重ねましたが、正確を期す校誌を早急に編纂することは困難となりました。

同窓生の皆様の了解を得て、今回は写真集を刊行し、年表、校誌の編纂は後日に期すことといたしました。

この写真集は、当時の状況を知る興味深い冊子であります。

編集委員の方々には大変な労をわざらわせました。深く感謝申し上げます。

平成3年4月

山梨県立甲府第一高等学校校旗



山梨県立甲府第一高等学校校歌

昭和23年10月22日制定

上條馨 作詞
小松清 作曲

一、甲斐の国 み中に建ちて

古へゆ 雄心伝へ

新しき 世の鑑とし

勉めてむ この学舎に

二、日に新た また日に新た

弥高き のぞみをもちて

真なる 理究め

励みなむ 若人我等

三、舞え立つ 芙蓉の高根

清き哉 甲斐の山川

もろともに 玉と磨きて

賛くべし 天地の化育



県立第二高等女学校







旧講堂



百周年記念館

歴代同窓会長



第7代 新海栄治



第8代 芦沢留次郎



第9代 小野熊平



第10代 寺田七男



第11代 矢崎茂三郎



第12代 清水八束



第13代 高速啓一



第14代 飯島哲



第15代 桜川義仁

[第1代 山本保・第2代 松谷緑郎・第3代 深沢議一・第4代 深沢平重
第5代 島田盛平・第6代 飯島豊甫]

歴代校長



初代校長 吉田 義靜



第2代校長 平井 正



第3代校長 長倉 雄平



第4代校長 村上 孝光



第5代校長 黒川 雲登



第6代校長 幸原 坦



第7代校長 大島 正健



第8代校長 末久喜十郎



第9代校長 田村 喜作



第10代校長 江口 復博



第11代校長 腹部 以忠



第12代校長 大野 芳麿



第13代校長 永井 德潤



第14代校長 近藤 兵庫



第15代校長 篠原 寛二



第16代校長 雨宮 重治



第17代校長 斎藤 俊章



第18代校長 廣瀬 勝雄



第19代校長 高遠 啓一



第20代校長 根津 修藏



第21代校長 若林 勇



第22代校長 山下 標



第23代校長 岩波 政雄



第24代校長 山村 鉄夫



第25代校長 望月政廣



第26代校長 三澤 弘毅

創草期から錦町時代へ



徳典館の校門（廃材で復元した、上野原町桐原、山口家）

寛政7年（1795）12月、甲府勤番支配として入申した近藤政明と、先に着任の永見為貞とによって、寛政8年、甲府城追手勤番支配の役宅に置かれた仮学舎に、江戸湯島の昌平黙の分校として「甲府学問所」が創設された。初代教授方に、勝手小善請組の富田富五郎が迎えられ、勤番士の子弟に漢学を教授した。

享和3年（1803）、幕命により、学舎を甲府城追手南三丁（現・丸の内一丁目）に移築し、庶民の志ある者にも教授することになった。

文化2年（1805）、江戸昌平坂学問所の大学頭林衡は、「書經」の「舜典」に見られる「慎徽五典」によって、甲府学問所の名称を「徳典館」と命名し、その扁額を時の白河城主松平定信が揮毫した。この徳典館が本校の前身である。

徳典館は、明治5年（1872）の学制制定にともない、翌6年、開智学校と改称、さらに同7年、師範学校と改称し、教員の養成をめざした。同9年、甲府市錦町（現・中央一丁目）に校舎を新築した。

翌10年7月、師範学校内に初めて置かれた中学予備学科は、明治13年（1880）10月の中学校則の制定に基づき、併設されたまま、山梨県中学校と改められ、同月23日に開校式典を挙げた。この日こそ本校の創立記念日である。

翌14年、山梨県師範学校と山梨県中学校を合併し、校名を山梨学校と改称した。さらに翌年、徳典館と改め、師範学科、初等中学科を設置した。明治16年1月、校舎が焼失したため、太田町の公園内の民舎を教場として借り受けて教授を進めたが、ようやく、もとの地に成った。その後、「中学校令」、「尋常中学校ノ学科及其程度」などが制定され、明治20年（1887）、新たに山梨県尋常中学校として発足。その後幾多の変遷を経て、やがて、旧甲府城内に、はじめて校舎を新築して、明治33年新校舎に移ることとなった。

この時までの歴代の校長は、吉田義静、平井正、長倉雄平、村上孚光、黒川雲登、幣原坦といった先生方であった。

徽典館



甲府勤番支配役宅に徽典館の前身である甲府学問所の仮学舎が置かれた



徽典館初代教授富田富五郎の書跡



富田富五郎の墓（甲府市・尊体寺）



徽典館扁額・越中守松平定信書

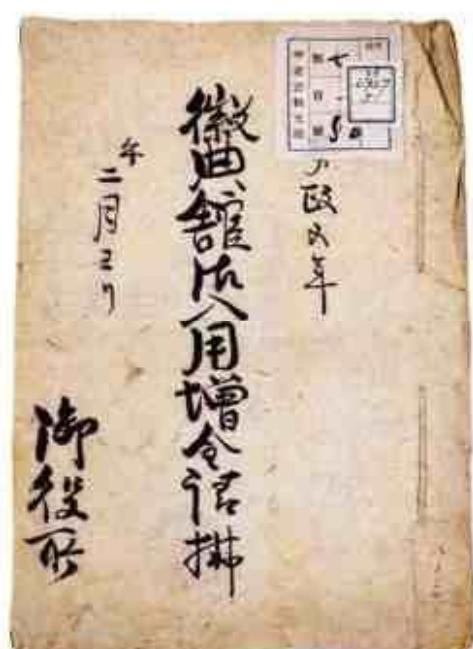
甲府學館成大學頭
林衡命名白川侯松
平定信揮毫出羽守
瀧川利雅伊豫守松
平定能命丁鱗之匾
額文化乙丑冬十月
也

幕府武臣白川義主
九月四日丑時書
越中守源定信

扁額裏面

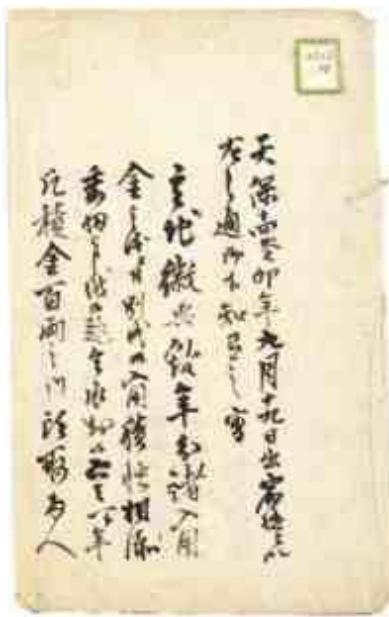


天保14年卯10月からの徽典館御入用金上納請取帳（甲州文庫）



徽典館御入用増金請払帳（安政5年・甲州文庫）

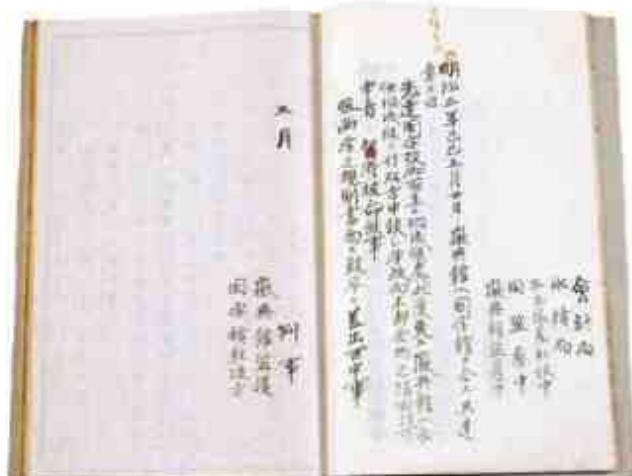
文化二年乙丑
九月四日丑時書



重新徴典館の碑（山梨大学内）



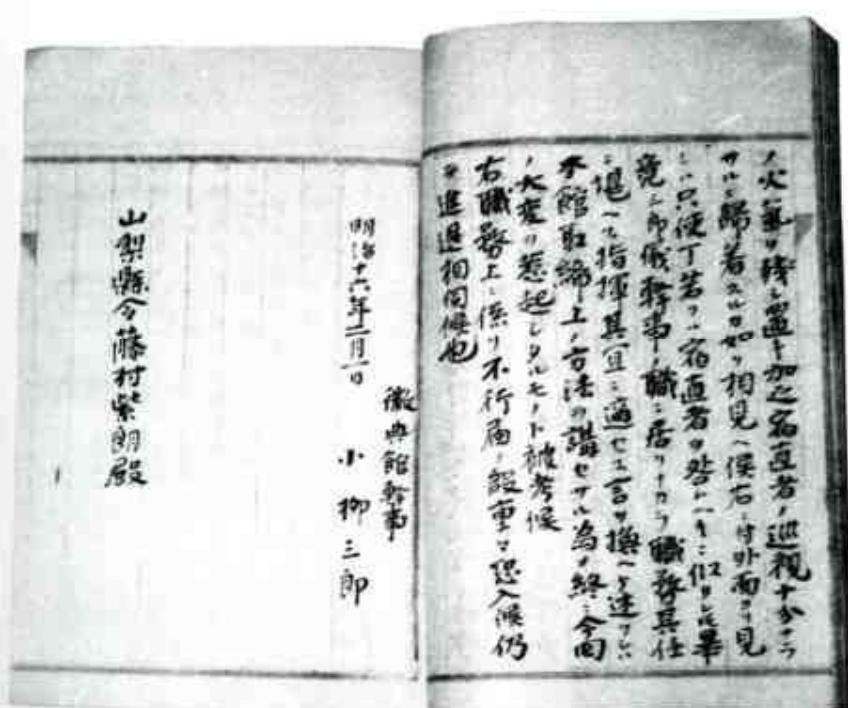
徴典館規則変革書（明治5年）



徴典館資料



徳典館正面 明治9年新築、同16年焼失



徳典館失火の進退伺い（待罪書の部分）



徳典館跡の碑

山梨日日新聞

明治十七年二月廿五日

月曜日

○山梨縣立小学校規則

規則

第一條

規則

第二條

規則

第三條

規則

第四條

規則

第五條

規則

第六條

規則

第七條

規則

第八條

規則

第九條

規則

第十條

規則

第十一條

規則

第十二條

規則

第十三條

規則

第十四條

規則

第十五條

規則

第十六條

規則

第十七條

規則

第十八條

規則

第十九條

規則

第二十條

規則

第二十一條

規則

第二十二條

規則

第二十三條

規則

第二十四條

規則

第二十五條

規則

第二十六條

規則

第二十七條

規則

第二十八條

規則

第二十九條

規則

第三十條

規則

第三十一條

規則

第三十二條

規則

第三十三條

規則

第三十四條

規則

第三十五條

規則

第三十六條

規則

第三十七條

規則

第三十八條

規則

第三十九條

規則

第四十條

規則

第四十一條

規則

第四十二條

規則

第四十三條

規則

第四十四條

規則

第四十五條

規則

第四十六條

規則

第四十七條

規則

第四十八條

規則

第四十九條

規則

第五十條

規則

第五十一條

規則

第五十二條

規則

第五十三條

規則

第五十四條

規則

第五十五條

規則

第五十六條

規則

第五十七條

規則

第五十八條

規則

第五十九條

規則

第六十條

規則

第六十一條

規則

第六十二條

規則

第六十三條

規則

第六十四條

規則

第六十五條

規則

第六十六條

規則

第六十七條

規則

第六十八條

規則

第六十九條

規則

第七十條

規則

第七十一條

規則

第七十二條

規則

第七十三條

規則

山梨日日新聞

明治十七年三月一日



卒業証書及び入学願書書式（左）と微典館規則を伝える、山梨日日新聞記事



明治17年、再築された八角三層樓の微典館



徴典館の徽章



徴典館高等漢學科卒業証書



小學習字本

甲州文庫	
山梨縣立 生徒試験成績一覽表	
小學生	中學生
大學生	高級生
高級生	大學生

山梨縣徴典館の生徒試験成績一覽表（甲州文庫）

甲州文庫

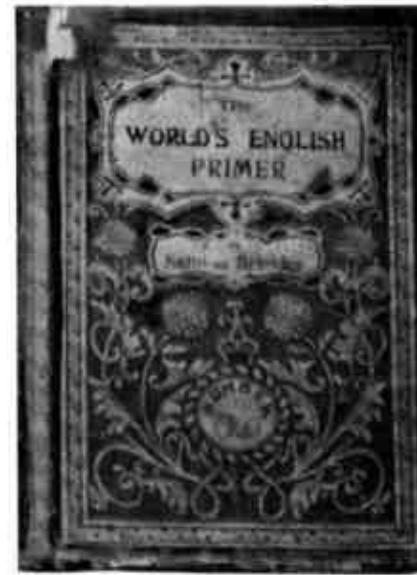


国語

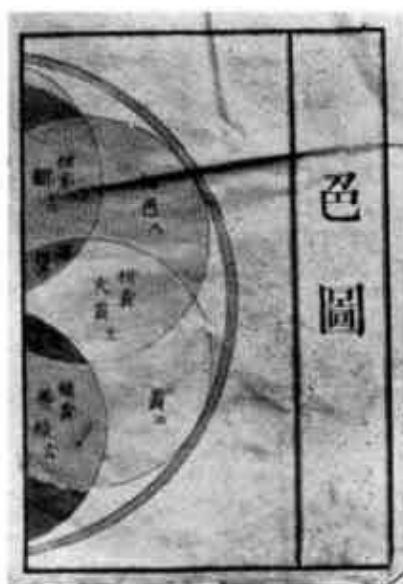
徽典館で使用した教科書の一部



理科



英語

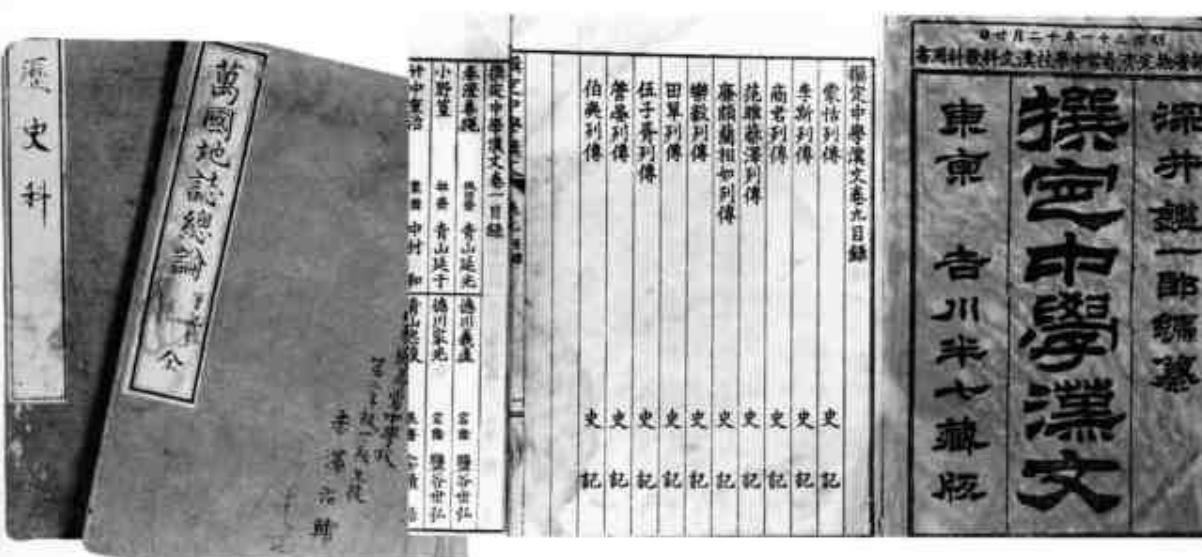


図画





明治20年、師範学校女教場を改築して、山梨県尋常中学校の校舎とした



山梨県尋常中学校の教科書の一部



尋常中学校生徒のノート

明治40—大正5年使用

人本

河西穰

入学 明治十八年八月 日

大庭

水沢庄兵衛

トヨタケイイチエ

禁籍

父兄
深白二男

豊原郡東方村多和の河西

現地 十六年 月

西都

トヨタケイイチエ

明治九年夏陽香校入學三年八月陽月生後、轉學五年三月
三番目第三枝株式会社五才、自前

第一號

生徒學籍簿

附人品原簿

自一
至三一
〇年

第十六百三

學退	御賞	第落級登			學級	修業年月日	得點百分比
		初等	八級	九級			
明治九年五月十二日		明治九年七月廿七日	明治九年七月廿七日	明治九年七月廿七日	及	及	及
	理由	明治九年四月	明治九年四月	明治九年四月	科	科	科
		明治九年四月	明治九年四月	明治九年四月	級等	級等	級等
		明治九年四月	明治九年四月	明治九年四月	明治九年四月	明治九年四月	明治九年四月
		明治九年四月	明治九年四月	明治九年四月	明治九年四月	明治九年四月	明治九年四月
					件	件	件
					級等明	級等明	級等明

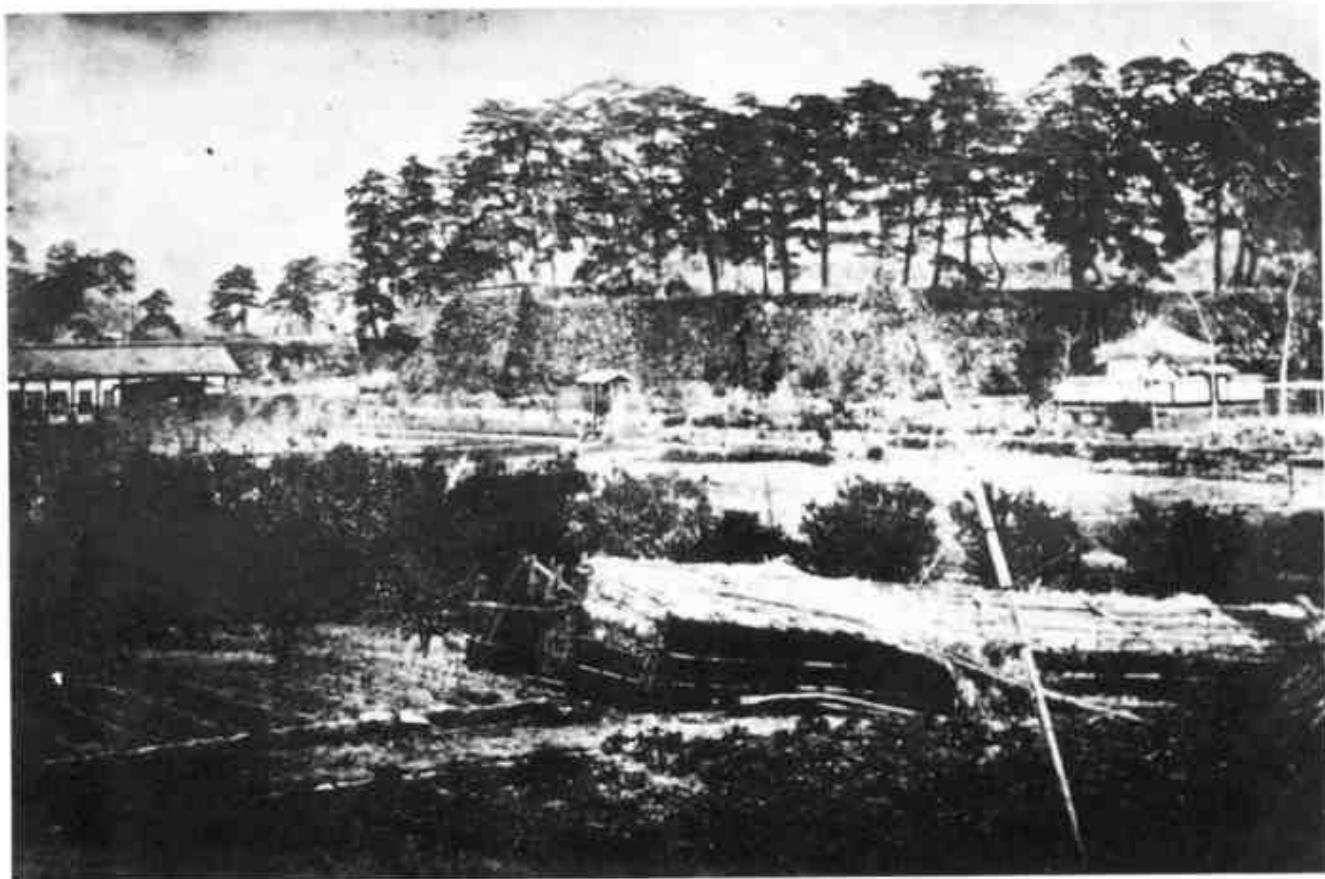
第貳號

生徒學籍簿

附人品原簿

自三一二年
至七六年

学籍簿、表紙とその内容



明治初期の甲府城内



太鼓橋の擬宝珠



甲府城の御金
蔵で甲府中
学校新築後も
残っていた



甲府中学校建築人工帳

甲府城内時代

山梨県中学校
山梨県第一中学校
山梨県立甲府中学校



取りこわされる甲府中学校正門

明治32年(1899)4月、「中学校令」の改正とともに、校名を山梨県中学校とし、同年5月、甲府城内に校舎新築の起工式を行った。

新校舎の開校式は、翌33年4月、文部大臣樺山伯爵、沢柳普通学務局長らが臨席して盛大に執り行われた。

校舎は、現在の山梨県庁舎全域に相当し、敷地面積は、9,410坪(約31,053平方m)、建坪は1,013坪(約3,343平方m)。通常教室、特別教室、講堂、寄宿舎などが整備された。錦町の旧校舎は、そのまま本校の分教場とした。同年10月23日、創立20年記念式典が挙行され、勤続5年以上の教職員に褒状が授与された。

明治34年(1901)4月、錦町の分教場に山

梨県第二中学校が設立されたので、校名を山梨県第一中学校と改め、さらに同月、県立山梨県第一中学校と改称した。

明治39年(1906)6月1日、山梨県立甲府中学校と改称、校旗を樹立した。以来、その校名は終戦まで長く続いた。

明治43年10月23日、母校創立30年記念祝賀会の席上で、甲府在住の同窓生が発起人となり、甲府中学校同窓会を設立、初代会長に山本保が選任された。

大正13年(1924)11月、第1回強行遠足が東京、新府城、昇仙峡方面に実施された。

甲府城内時代の歴代校長は、幣原坦、大島正健、末木喜十郎、田村喜作、江口俊博の諸先生であった。



山梨県中学校正門



校舎

静かな深山の中に村崎山の人が、今やその水

は、神氣を失、只だ、宿を出でよう

だ、お前、お子、宿を出でよう

だ、など、故郷の傳、如何、君、其の體を

君はナニ子、其の姿を記したて、君の子を育て

は未だ全然へ、相手の眞理をり、子、君の法則を、

「ほ、君の眞理を、君の眞理を、君の眞理を、

君の眞理を、君の眞理を、君の眞理を、君の眞理を、

校友會雑誌

校友會雑誌

校友會雑誌

山梨県尋常中学校発行の「校友會雑誌」第1号（右、明治30年）と、
山梨県中学校発行の「校友會雑誌」（中、明治33年）



校友會雑誌編集委員

生徒の手になるさし絵



山梨県中学校第11回卒業記念写真



山梨県中学校、第11回卒業記念写真（明治33年）後列左から4人目が地下鉄創始者の早川徳次

川をのぞくと、げたやぞうりが、土手にぶつかりながら、ゆっくりながれていくところだつた。

なげこんだのは、もちろん徳次だ。人びとは、あわててひろいにはしつた。あたりに、ふどうの芽がふきはじめたころで、まわりの山やまがらふきおろす風はまだつめたかった。村の人たちは、ぬれたげたやぞうりに身をちぢめながらかえつていつた。

「まったく、しようのない子だ。あとでうんとしからにや。」

おこつている声のわりに、常富の顔はさびしくはなかつた。

早川徳次は、明治十四年十月十五日に生まれた。兄三人、姉ふたりの六人きょうだいの末っ子で、いちばん上の兄、富平とは十三も年がはなれでいる。

お母さんは、徳次が生きて九か月めに病氣でなくなつて、いた。

常富は、母親のいない徳次をことのほかかわいがついていたが、まけん気がつよくて、かなりのきかんばかりだったから、ときには庭のけやきの木に、しばりつけることもあつた。明治二十八年、徳次は師代咲尋常高等小学校を卒業すると、山梨県中学校（今の甲府第一高等学校）にすすんだ。

このころの中学校では、軍隊とおなじような訓練をする教練というのがあつた。

教練の時間になると、校庭にきんちようしてならんだ徳次たちにむかって、木刀をもつ

夢の地下鉄冒険列車

地下鉄の父・早川徳次と昭和をはしだした地下鉄

佐藤一美・作 地下鉄博物館・協力



ちがって地下鉄をはしらせた人

昭和のはじめ、東京は地下鉄が必要であることをとさ。たったひとりで交通量調査をおこない、独力で地下鉄建設の事を実現させた早川徳次の物語。

※著者：佐藤一美（東京都市開拓研究会）

早川徳次の地下鉄開設を記録している

夢の地下鉄冒険列車の内容

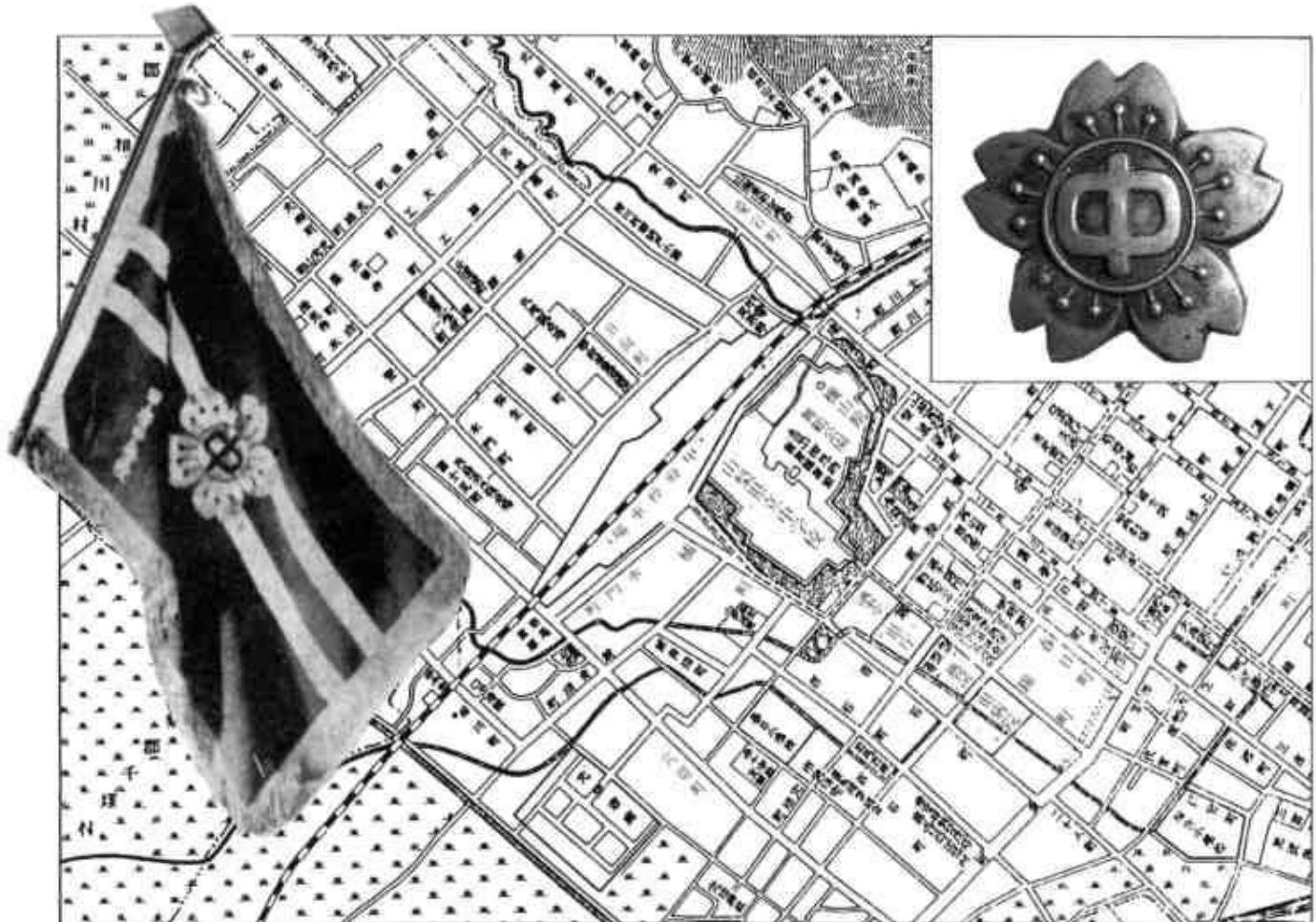
県立山梨県第一中学校の明治34・38年度学年試験成績表（頬生文庫）



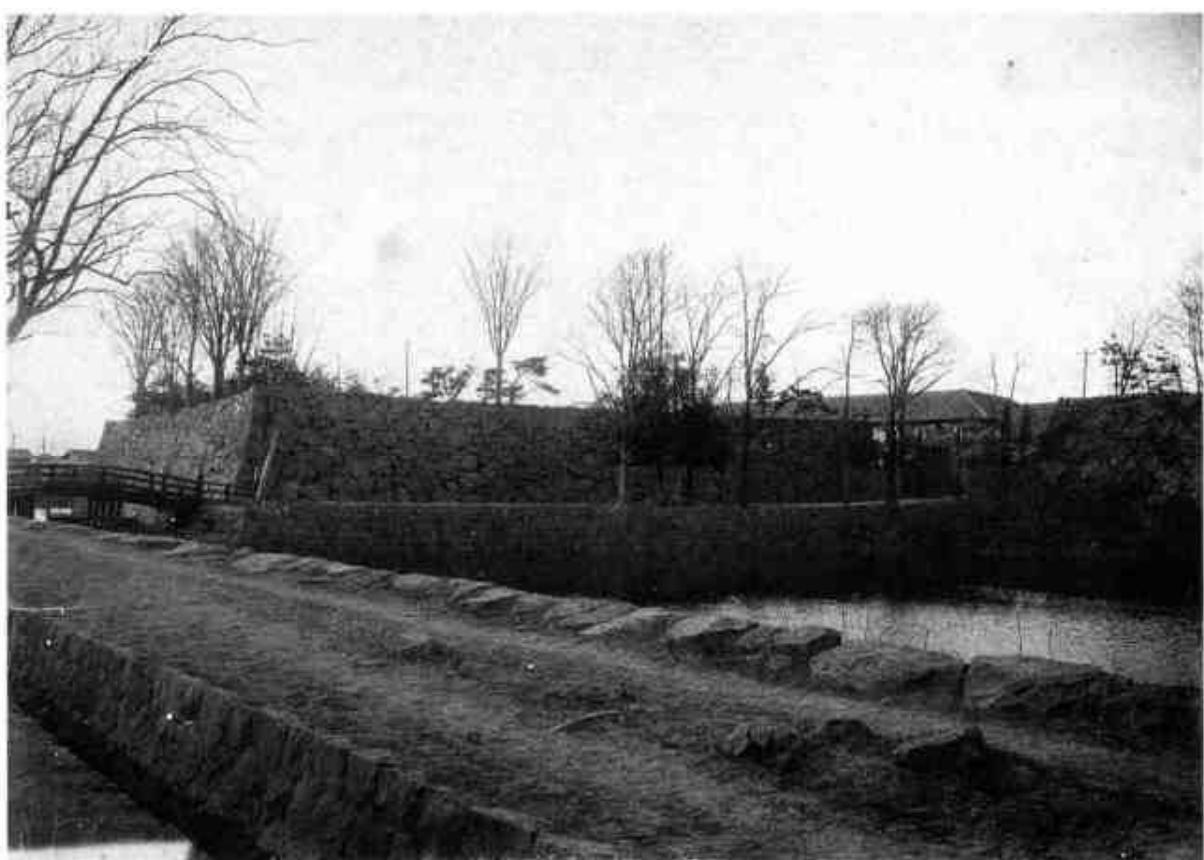
県立山梨県第一中学校の卒業生（明治38年3月）



授業料領收証、月謝は2円であった（明治41年）



甲府中学校校旗樹立（明治39年）



山梨県立甲府中学校正門



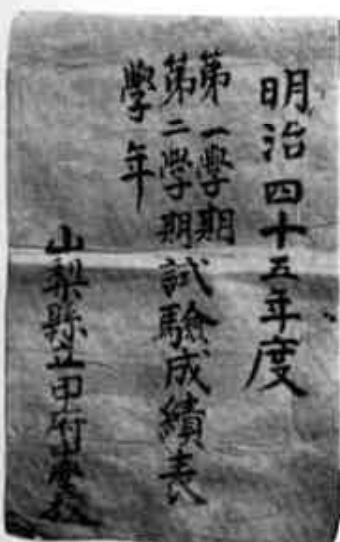
運動会記念絵ハガキ



運動会のプログラム



運動会のよびもの、分列行進(上)と発火演習



成績原簿（左）と、試験成績表

京高等商業學校	小野慶郎	(四十一年卒業)
東洋専門學校	石倉三郎	(四十二年卒業)
内藤	松村三郎	(同)
諸角	木戸	(四十一年卒業)
亞細文書院	名開	(三十八年卒業)
椿松	大庭	(四十二年卒業)
春谷	鈴木	(同)
吉田	吉田	(同)

○ 同窓會報

卒業生同窓會報立
明治四十三年十月二十三日母校創立三十周年紀念祝典を舉てるに際し、在校生卒業生發起となり同窓會設立を企て、當日到席せる卒業生に講話を聽取るに賛成、山本保氏を會長に、越石英一氏を副會長に、松谷経郎氏、深澤平太氏、深澤清一氏、大槻謙氏、相澤吉助氏、金原義夫氏を副會長に推举し、會場選定、役員選舉其他の一事を了す事となせり

同窓會報立會



初代同窓會長
山本 保



甲府中学校同窓會沿革史(右)と同窓會報

拜啓時 下春暖ノ節益々御潤禱奉賀仍然考業而從業内上置候通り愈々來ル四月九日ヲトシ甲府中學校内ニ於テ母校諸先生ニ對スル謝恩會並ニ同窓會第一回總會相催シ候間萬障御繰リ合セ同日午前第拾時ヲ期シ御出席被下度右得貴意候敬具

明治四拾四年四月五日

山梨縣立甲府中學校同窓會長
山 本 保

中江育三殿
聊カ準備ノ都合モ有之候ニ付乍御手數御出席ノ有無御回答相願度候

第一回同窓會總會開催通知



野球部選手（明治42年）



庭球部選手（明治42年）



撃剣部選手（明治42年）



柔道部選手（明治42年）

創立30周年記念(明治43年)



甲府中學紀念式

三十年紀念式は豫記

前九時講内大講堂に

生徒職員來賓及卒業

着するや大鷲校長の

柿沼内務部長は宮木

誠話の後ち

奥村兩親

師範の順

大學生

は、

誠話の後

大學生

は、

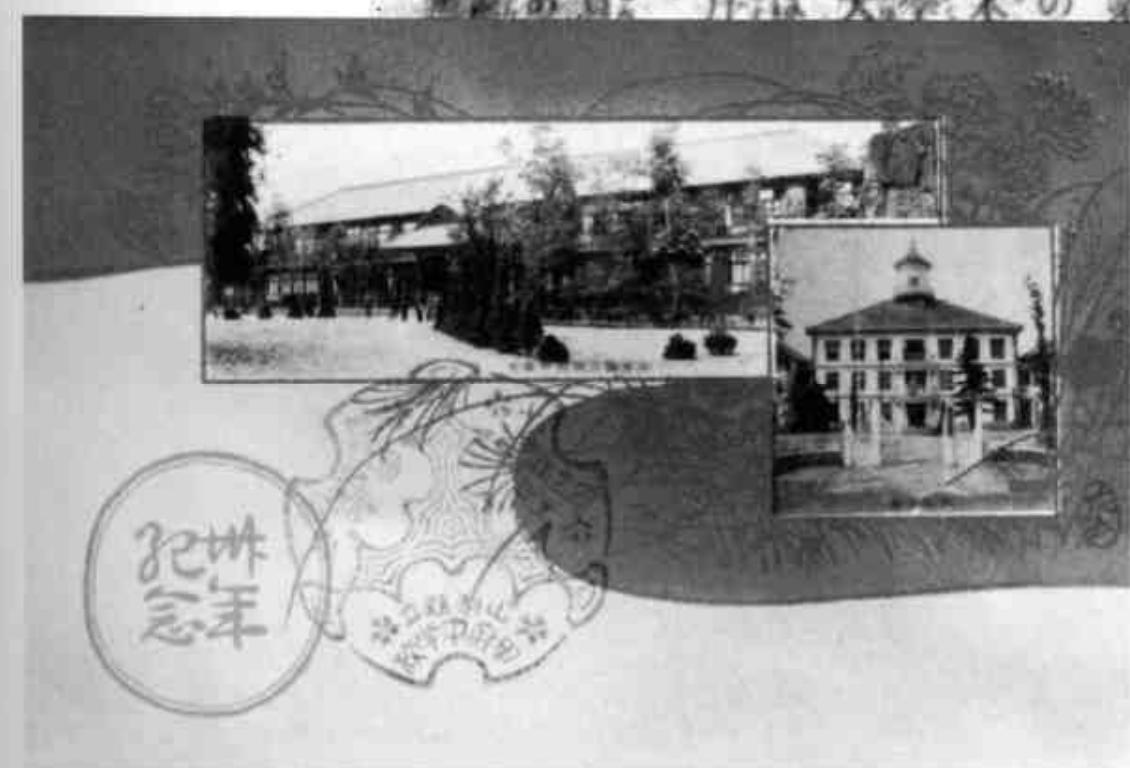
誠話の後

大學生

は、

誠話の後

大學生



創立30周年記念絵はがきと、山梨日日新聞の報道記事



寄宿舎と寄宿生徒

甲府中學校寄宿舍寮歌

(鳴呼玉杯の謡)

金甌無漏たぐひ無き
わきて自然の寵あつく
山河の粹を集めたる

三千年の大八島
國の數より撰まれて
吾等の甲斐を誇れ人

山に白根の雪ありて
彼の靈此の偉おのづから
かて：母校の懷に

人に機山の偉圖ありき
宿せる既に凡ならず
學べる兒等よ何の幸

其の若き子が行末の
育み守る南北や
時流の外に虹を吐く

いや安かれといつくしみ
二寮の虜こそ、ぞ實に
自由の郷土自治の領

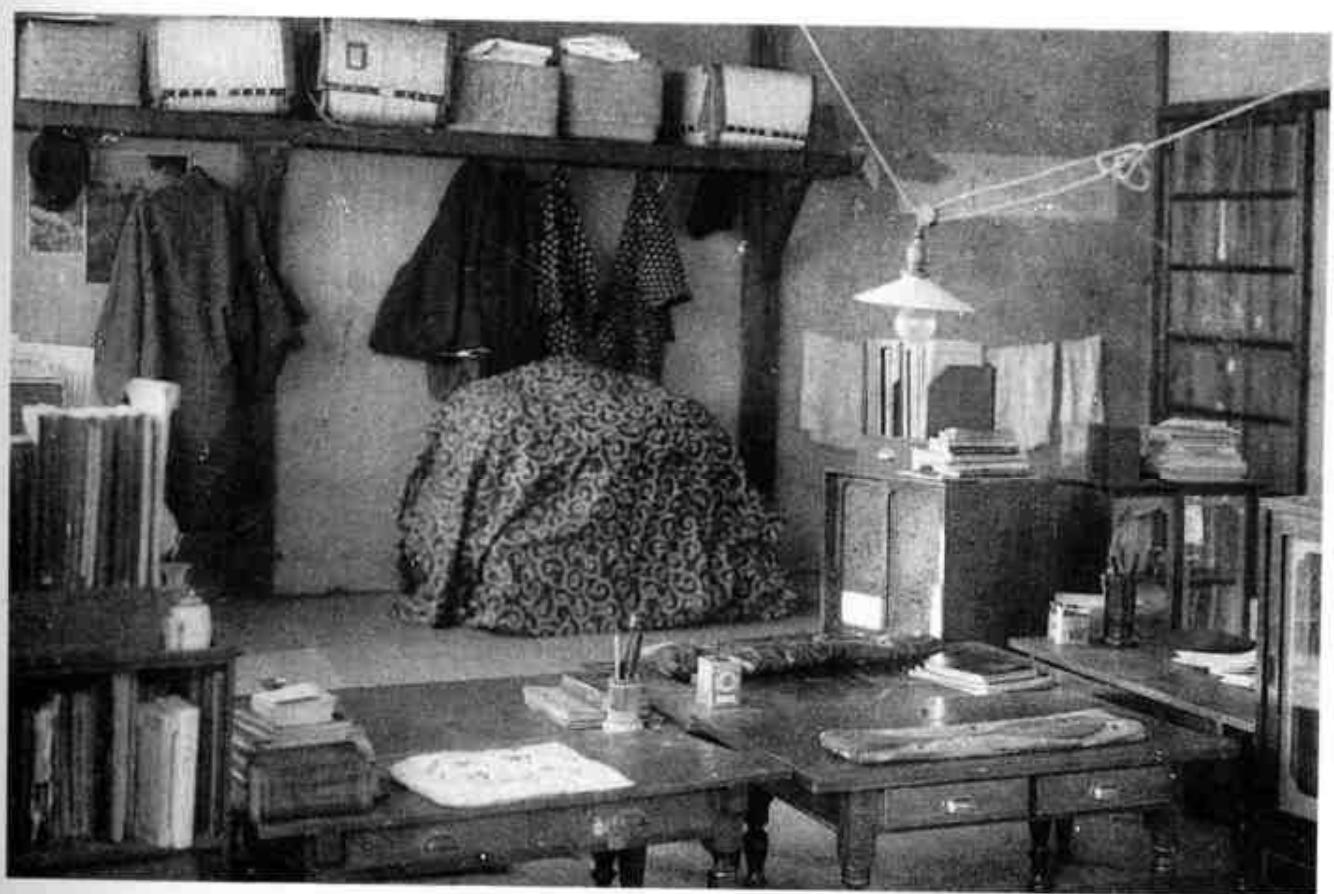
放逸は此れ自治の職
規律に超へざる春秋を
理想の道の果迄も

自由よさあれ不羈は敵
縁も深き室友とい
いそしみ勵め諸共に

明治四十二年四月廿日



寄宿舎の食堂



寄宿舎の自修室



寄宿舎の浴場及び洗面所



運動場



国・漢・修身教科書



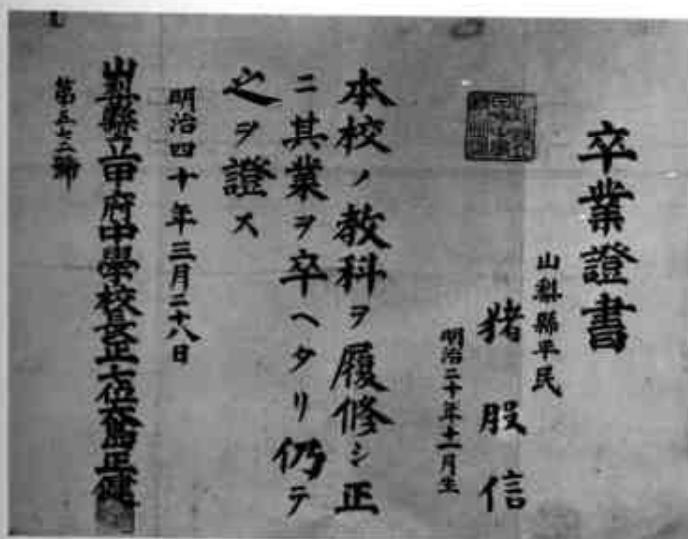
数 学



数 学



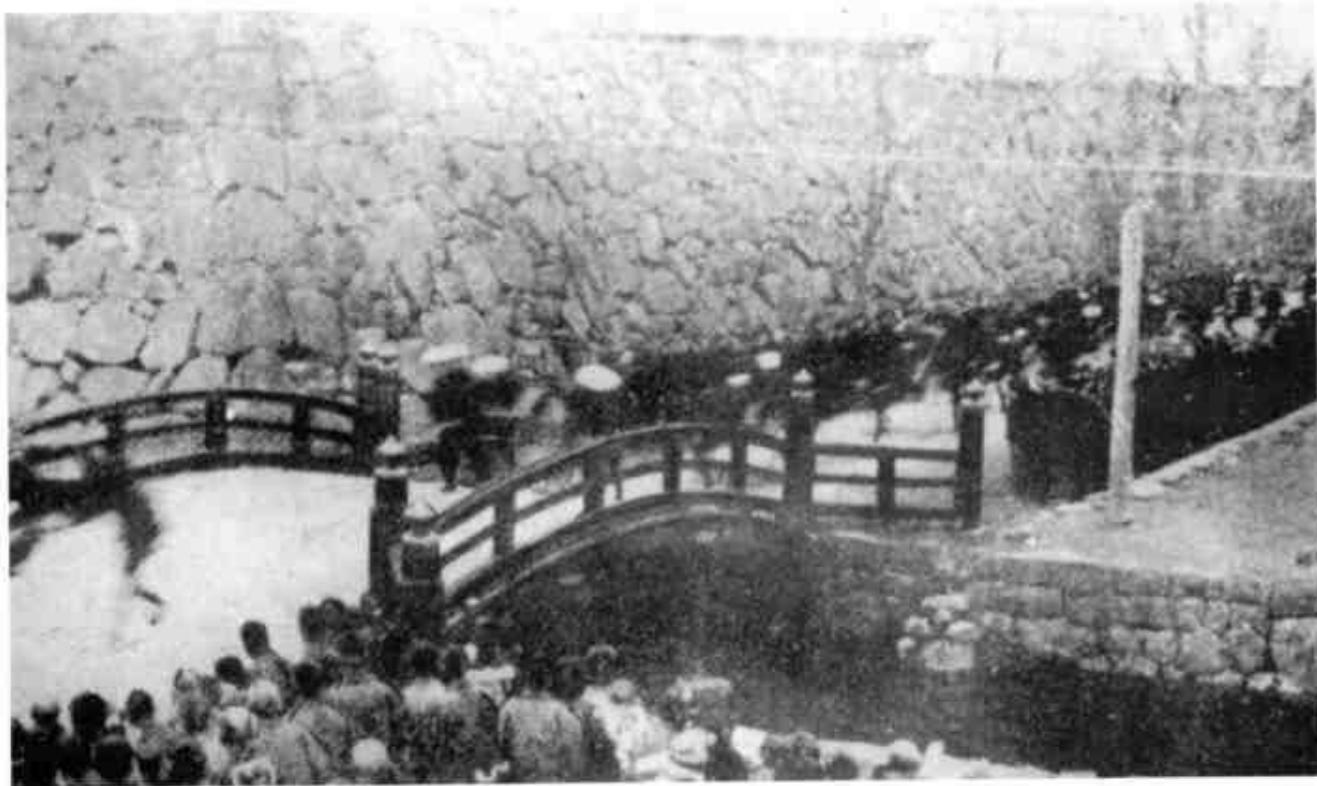
県立山梨県第一中学校修業証書（明治39年）



山梨県立甲府中学校卒業証書



英 語



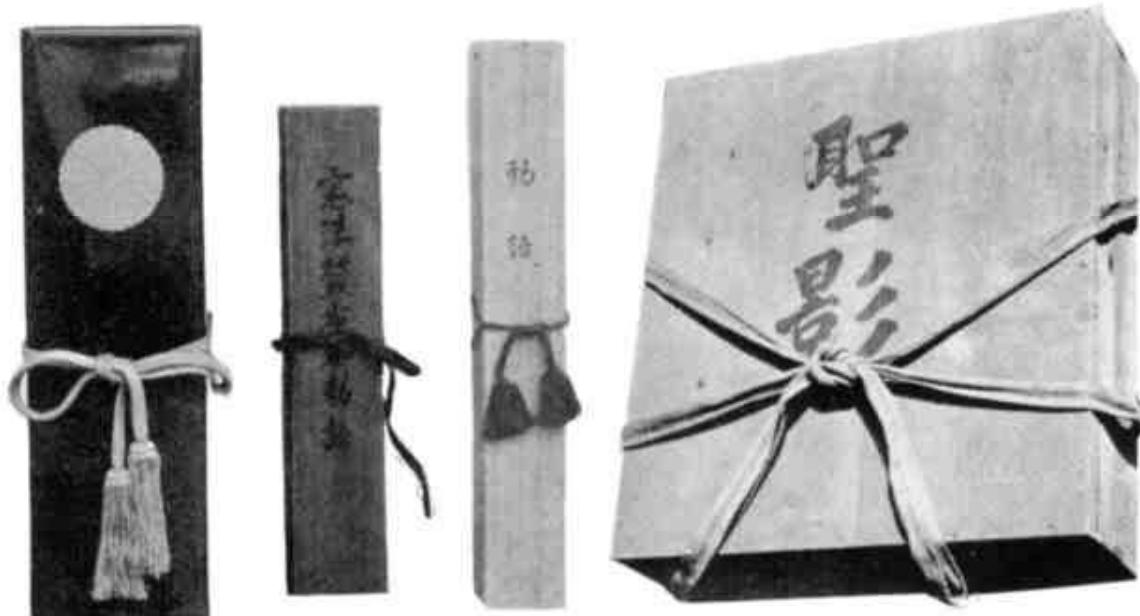
東宮殿下(大正天皇)ご来校(明治45年)



東宮殿下ご来校記念絵はがき



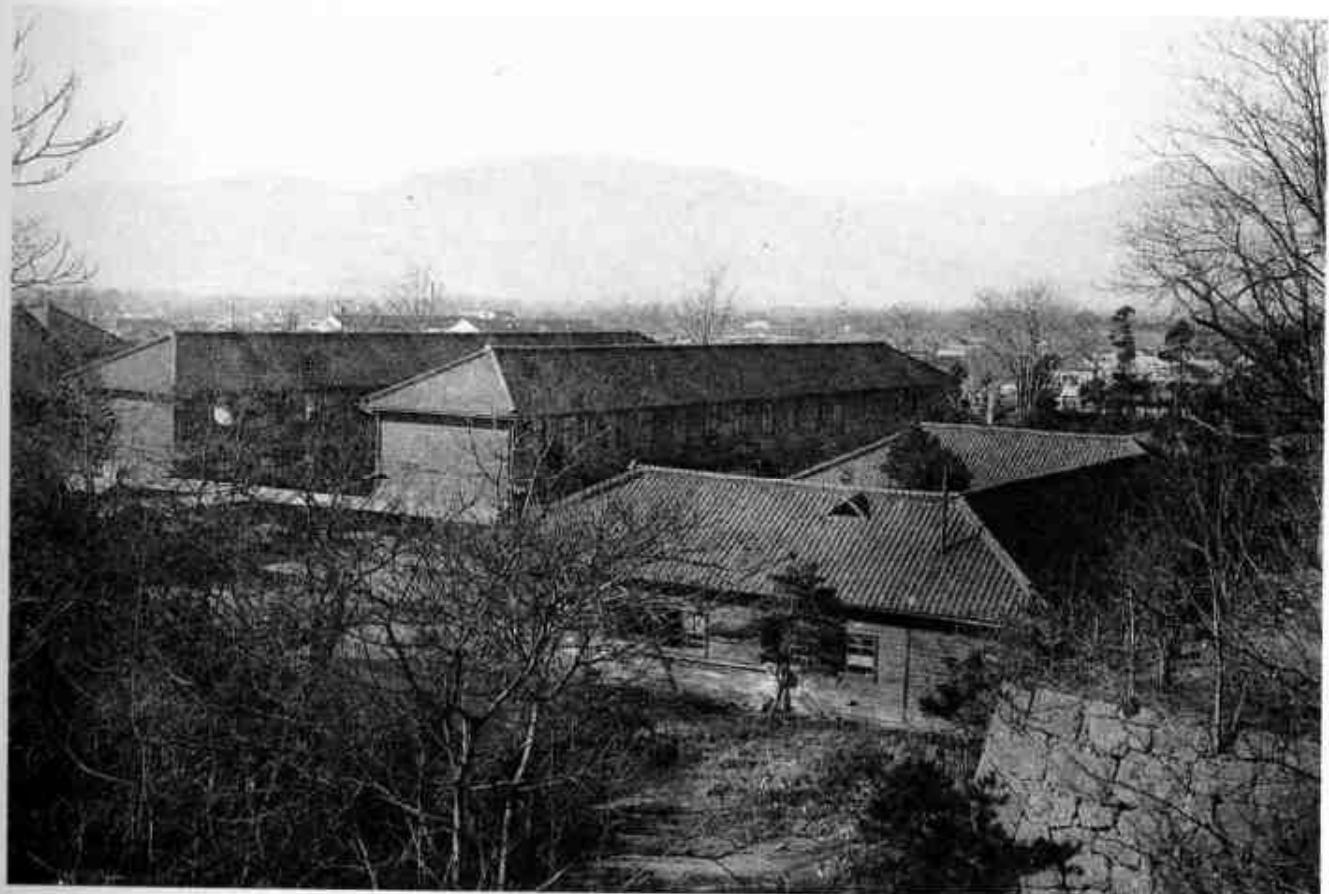
東宮殿下と学校玄関



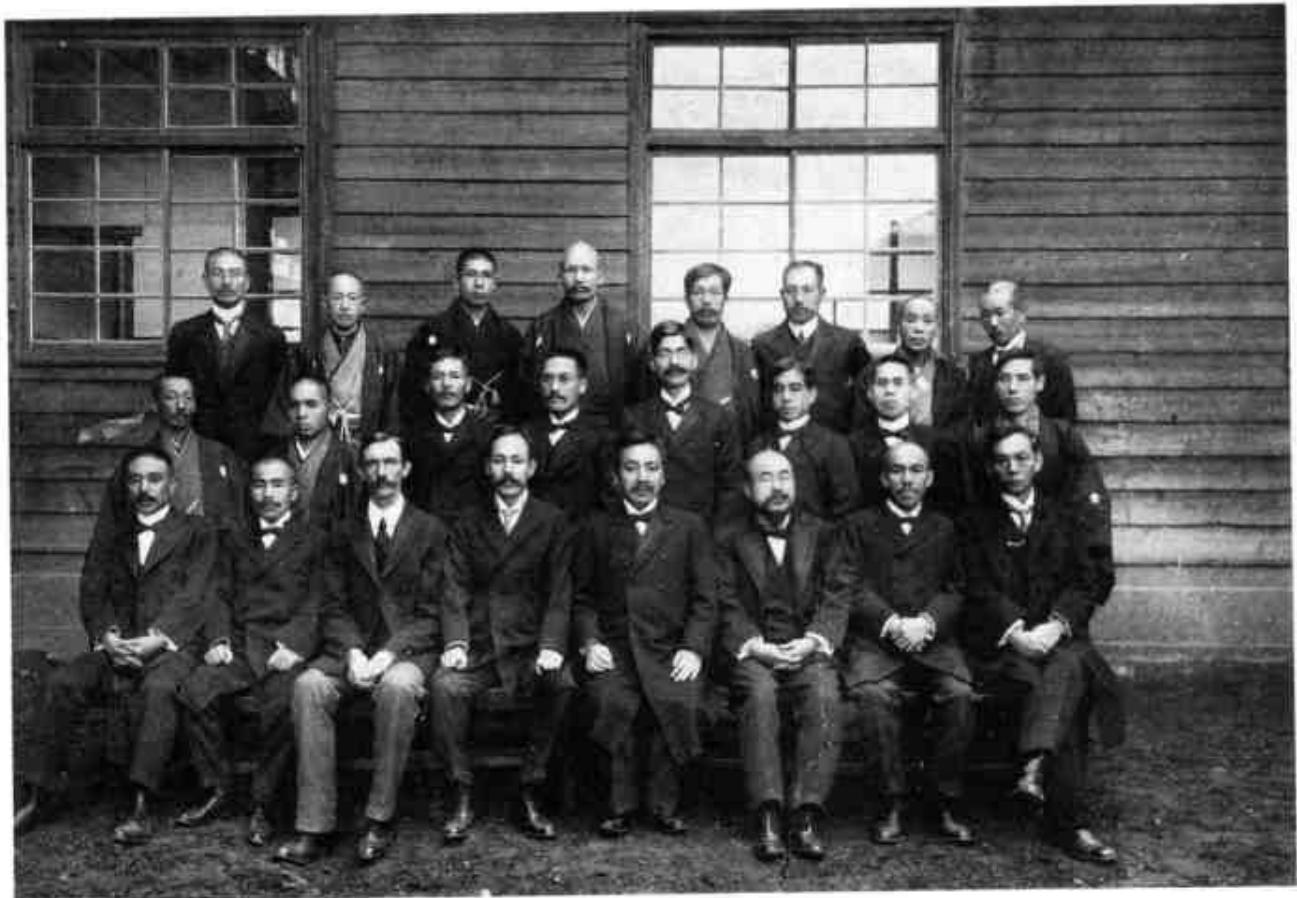
当時ご下賜の聖影・勅語・詔書の箱



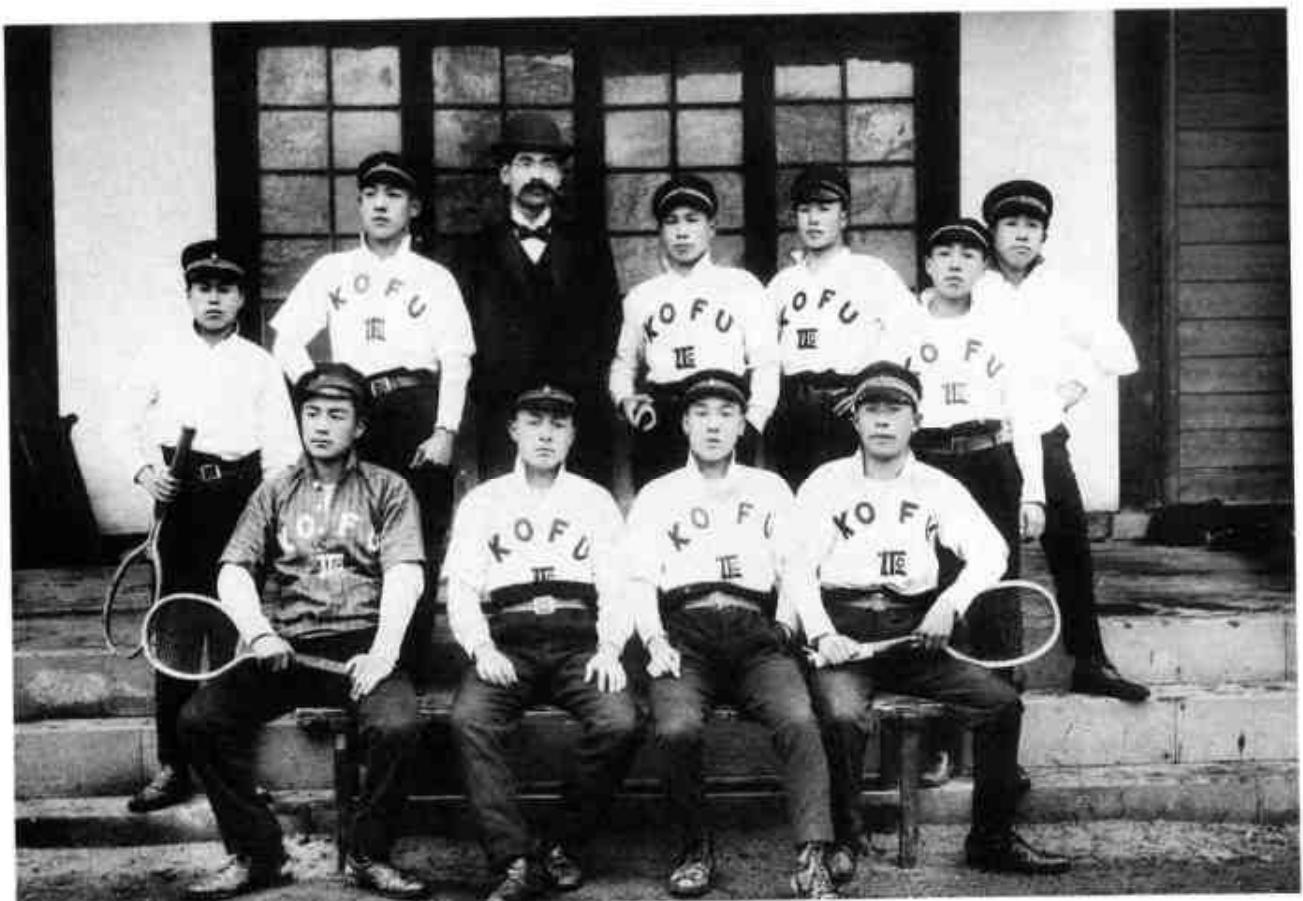
校舎前庭のテニスコート



寄宿舎全景



明治末期から大正初期の職員（大正2年）



庭球部（大正6年卒業）



野球部員（大正 6 年卒業）



野球部員（大正 7 年卒業）



柔道部員の練習



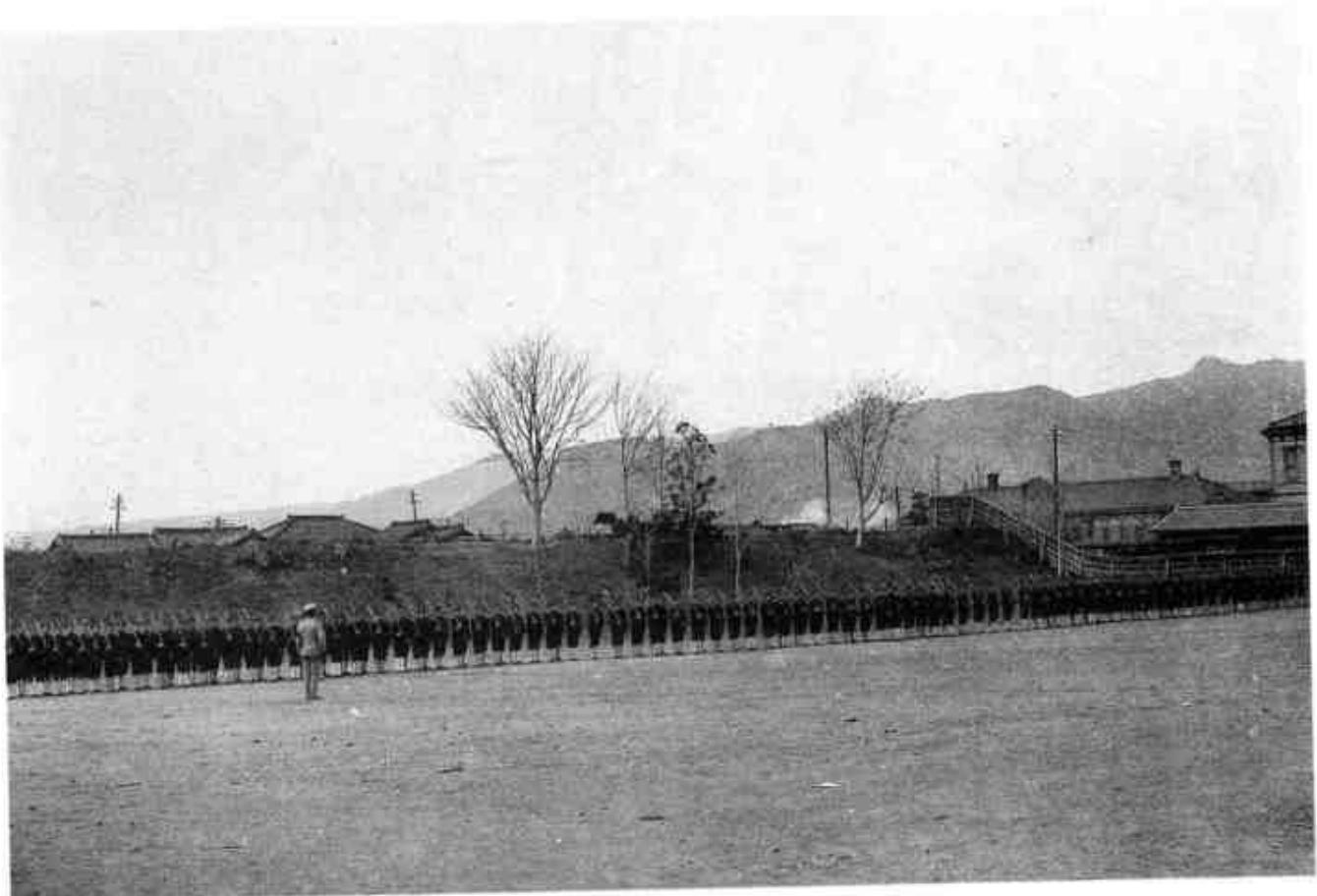
擊剣部員の練習



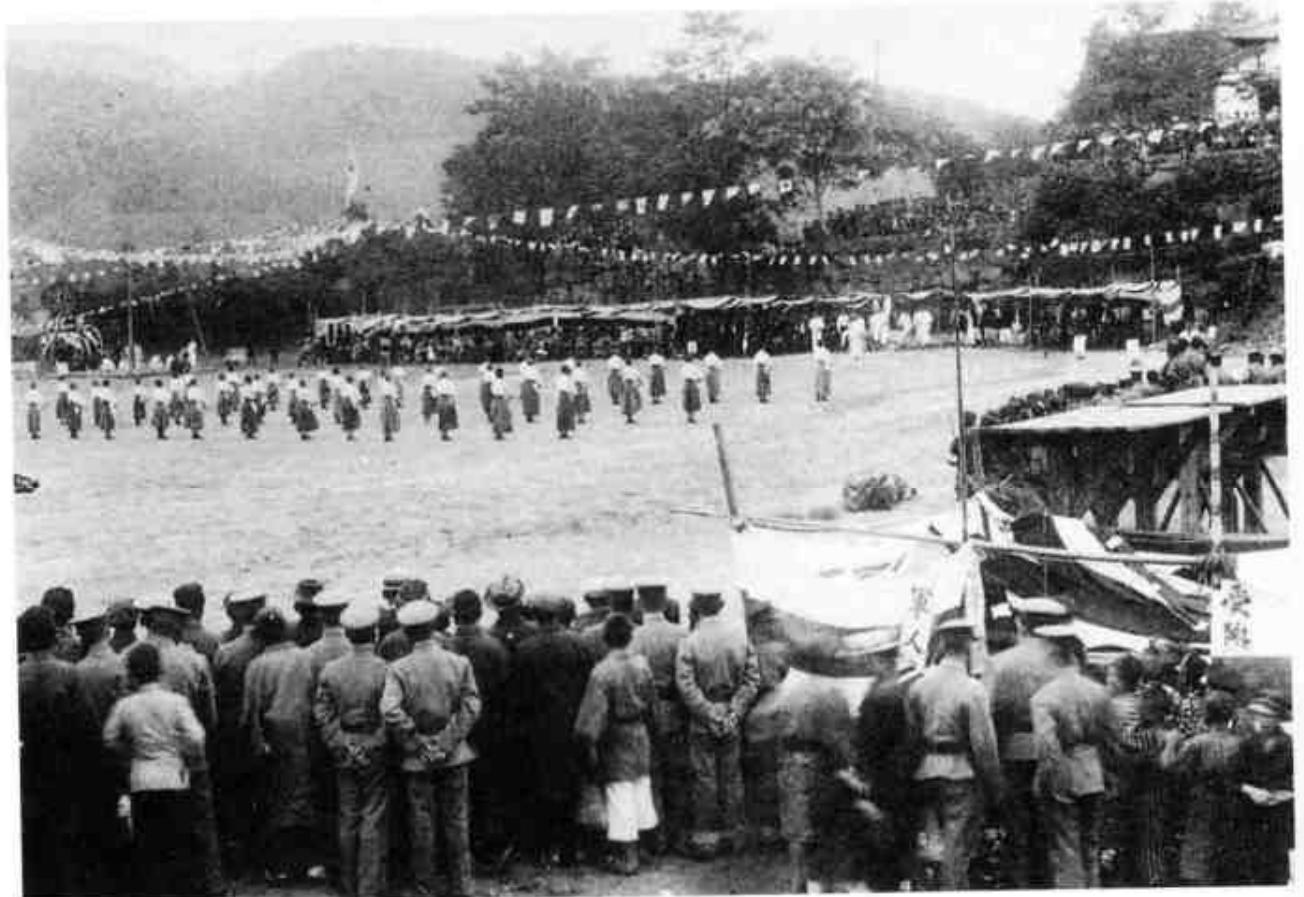
角力部員（大正 8 年）



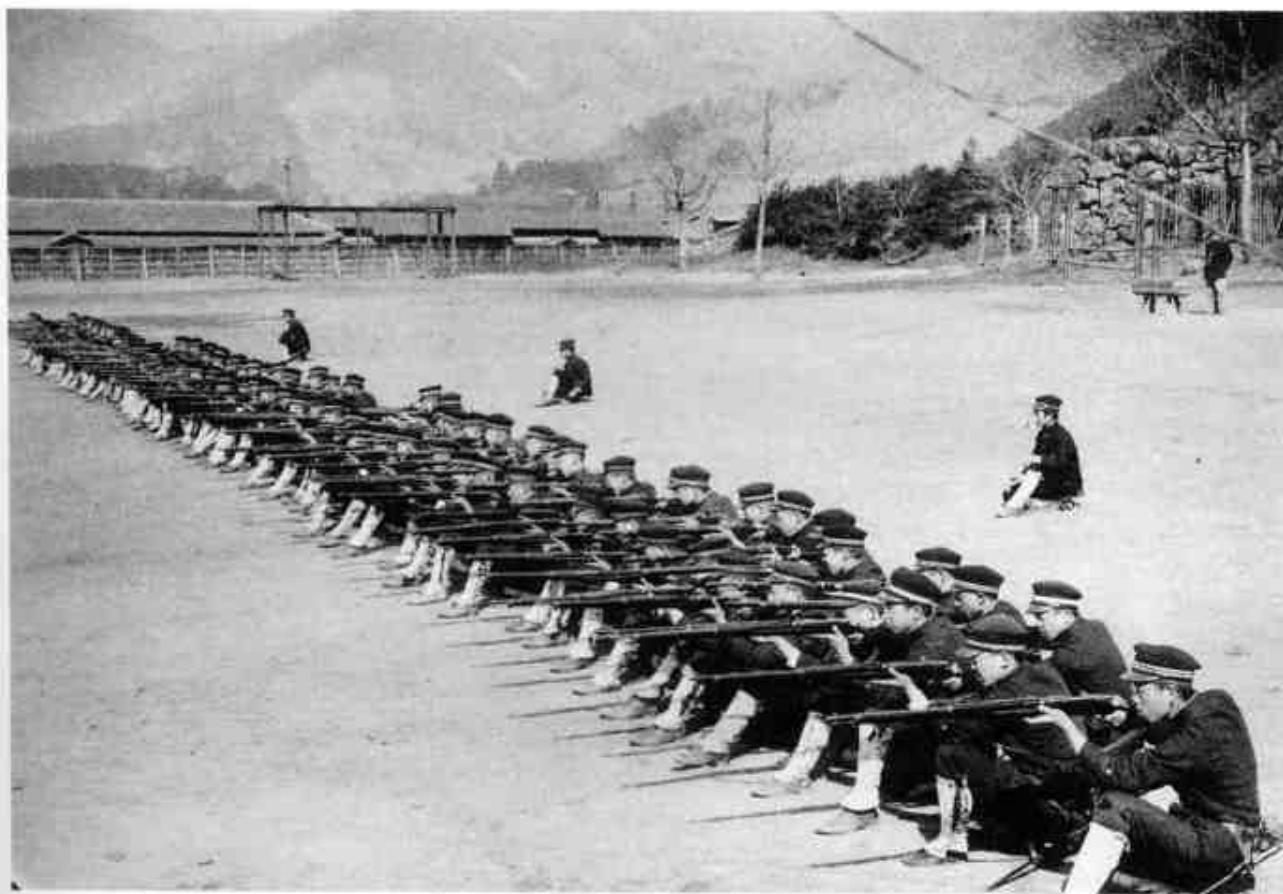
弓道部員（大正 8 年）



中隊教練（大正 4 年）



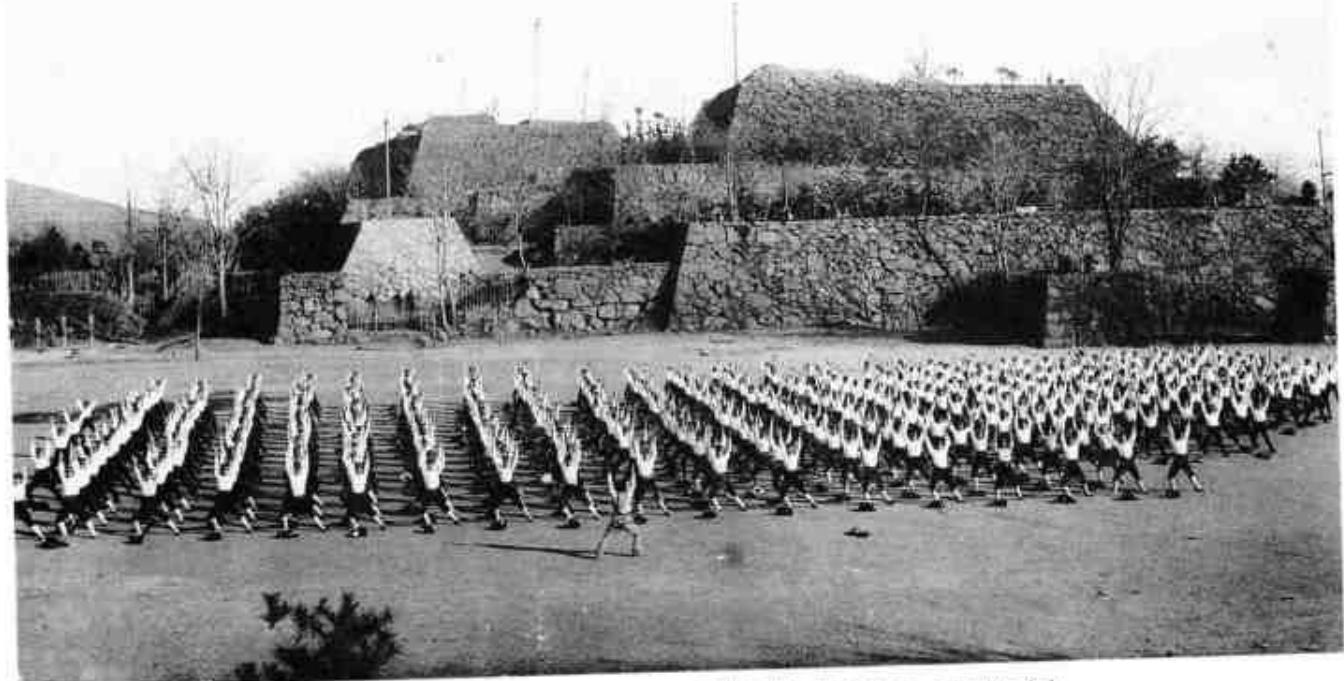
秋季大運動会（大正 8 年）



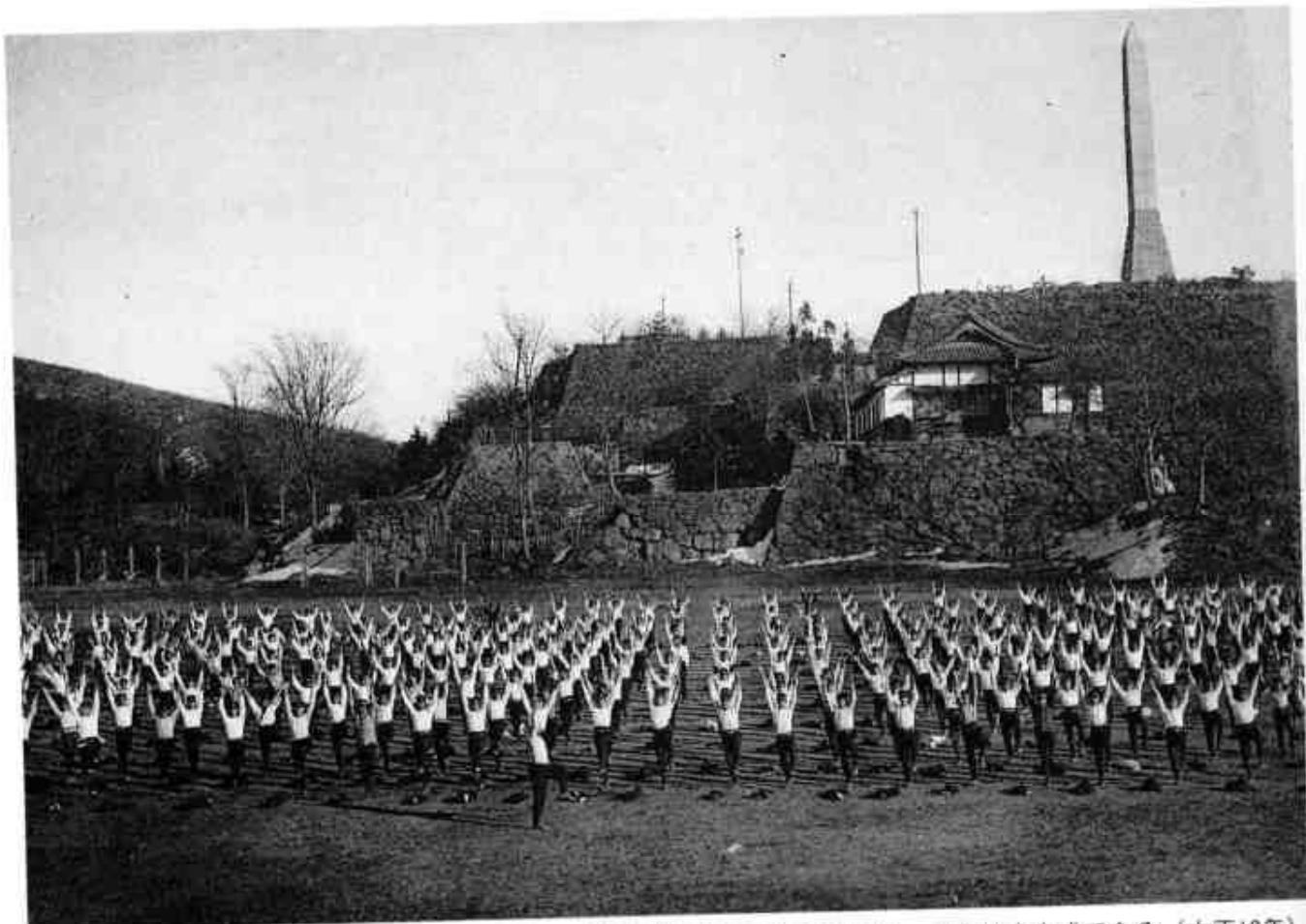
中隊教練（大正6年）



中隊教練（大正11年）



全校生徒の徒手体操、このころは謝恩塔が見えない（大正6年）



徒手体操、上の写真と同じ位置からの撮影で、謝恩碑が立てられているが、台座は未完成である（大正10年）

山梨県立甲府中学校校歌

昭和三年十月二十三日制定
三井甲之作詞

一、我等は日本に生れたり
神の御代より一系の
皇統戴く我国に
生れしことのうれしさよ
皇國の榮えは天地と
共に窮りなかるべし

二、大和島根に山めぐる

甲斐の国あり水清き
郷土の歴史顧みよ
我等の務め軽からず
見よや南に富士ヶ嶺は
皇國の鎮めと聳えたり

三、大海原の揺りやまぬ
波をも風をも凌ぎつ
護れ皇國を諸共に
国民挙りて國のため
撓まず萎縮まず辟易がす
進むぞ大和ごころなる

昭和初期の山梨県庁々舎は、機構の拡張、郡役所の廃止などによる職員の増員で、いちじるしく狹隘となり、老朽化も進んで危険な状態であった。

そのため近代的建物に改めるべきだという声が高まり、実現のためには、財源の関係から、まず、甲府中学校を適当な場所へ移し、その跡地へ県庁庁舎を新築し、旧県庁々舎跡地を売却して財源に当て、不足分は、県資源の有効利用、事業家の寄付等を当てるなどの協議が県議会で論議された。

このような経過から、昭和3年7月、本校は現在地に移転することになった。新校舎は当時としては、県下一を誇るモダンな建物で敷地は32,990平方m、鉄筋3階建て20教室の本館、生徒控室、特別教室、武道場、のちに講堂などが整備された。工費は、30万675円79銭であった。

当時の学校をとりまく環境は、付近に住宅はほとんどなく、北に桑畑をへだてて、歩兵第49連隊の兵営が軒をつらね、営内から聞こえる囃喰とひびくラッパの音、相川を西にへだてた練兵場の銃声、兵士の雄叫び、それが移転当時の甲府中学校の「隣人」であった。

昭和6年9月、満州事変が勃発。翌7年1月、日本海軍陸戦隊が、上海で中国軍と交戦するなど、戦時色が日増しに高まり、軍事教練は、中等教育

の正課として重くみられた。

このように世情不安の昭和10年、本校野球部は全国中等学校野球大会山、神、静ブロック大会で優勝。甲子園へ栄光の駒を進めた。

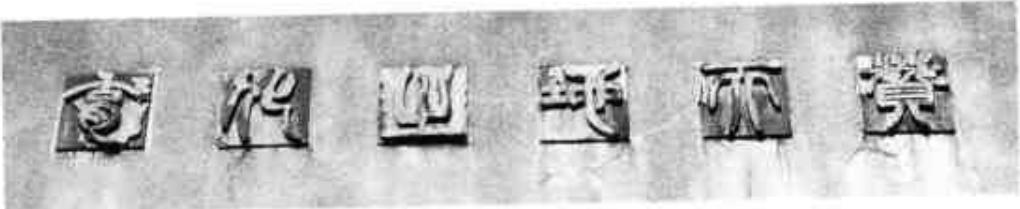
昭和12年7月7日、日華事変が勃発。戦火はそのまま、太平洋戦争へと拡大していった。

昭和19年、戦争は熾烈をきわめ、前年6月の「学徒戦時動員体制確立要綱」決定を契機に、日本の未来を背負う若者たちは否応なしに前戦へ引き出され、学徒たちも少年航空兵・飛行予科練習生などとして、前戦へ送られることになった。

昭和19年8月、「学徒動員令」が公布され、学校報国隊が結成された。本校でも5年生は相模原造兵廠、4年生は横須賀の海軍航空技術廠、3年生は、大船の海軍燃料廠へ通年動員された。1・2年生は農村に出動。日曜日も返上の動員であった。

昭和20年、日本は、沖縄を失って以来、米軍の日本本土空襲は激しく、7月7日の夜の甲府市大空襲を受けた際、本校もその標的とされ、生徒控所、小講堂、特別教室、新館などを焼失した。こうして8月15日、遂に終戦を迎えたのである。

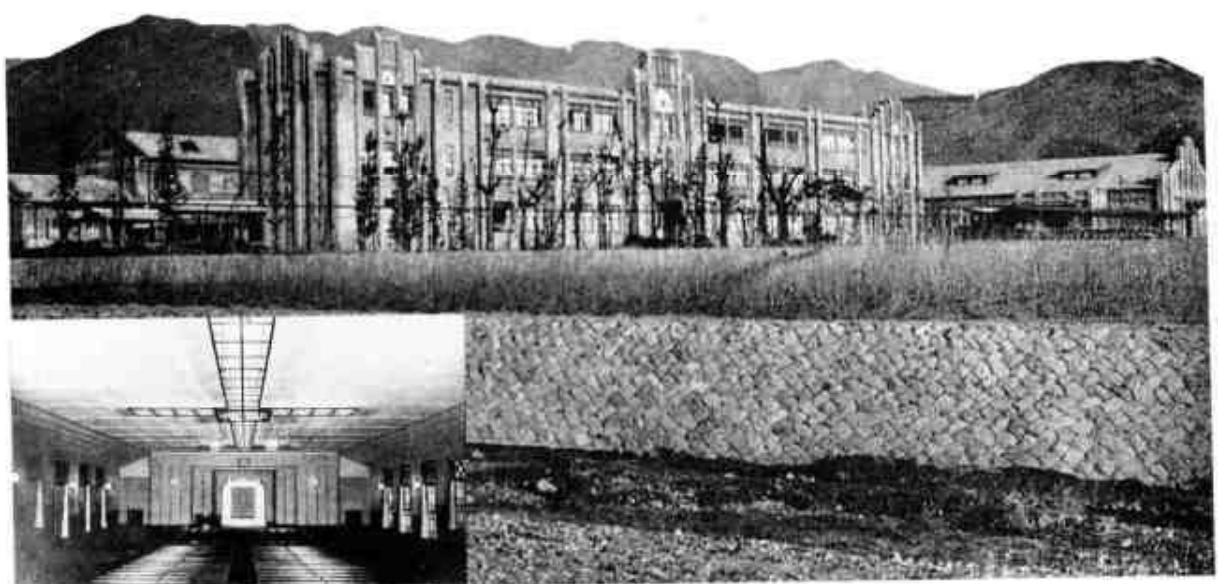
終戦までの、歴代校長は、隈部以忠、大野芳磨、永井徳潤の諸先生であった。



正面玄関上の「贊天地之化育」扁額



甲府中学校門柱



昭和3年、現在地へ校舎を新築移転した



落成した講堂（昭和4年）



校舎前庭園の記念碑（昭和4年）